

2016

藤沢市少年サッカー
レベルアップ
～タフな選手の育成～

目的

藤沢市少年サッカーのレベルアップ
～タフな選手の育成～を図ると共に、
JFA2005年宣言にある「サッカーを
通じて豊かなスポーツ文化を創造す
る」を推進する。

現状①

JFA2005年宣言の「サッカーを愛する仲間＝サッカーファミリーが1000万人になる」ことから、審判資格取得者が増加しています。特に少年サッカーの審判員は、保護者が多く、サッカー未経験者が多数います。

サッカー未経験者が少年サッカーの審判をすることにより、曖昧な判定が多く見られ、曖昧な判定に対しベンチにいる指導者や観客（主に保護者）から、異議に近い発言が聞かれ、その発言により正しくない判定がされることもあります。

現状②

更にはその判定で勝敗が決まってしまうこともあります。主審の決定は最終であり、判定は受け入れなければなりません。

しかし、その前提として試合が円滑に進められていることが必要ですが、円滑に試合が進められていないのが現状です。

課題

審判員のレベルアップを図るだけでなく、指導者の意識改革を図る必要があります。

全ての4級審判員が審判経験が豊富でないことについて指導者を含め、すべての藤沢市少年サッカー関係者が理解する必要があります。

藤沢市少年サッカーの指導者として、 タフな選手を育成するために

《指導者》

ファウルがあった場合、指導者はファウルの判定を指摘する前に、選手がプレーを続けられたのか、続けようとしたかを見極め、その点について選手に意識させます。

具体的には

ける、つまずかせる等のファウルを受けた選手が、直ぐに立ち上がる。

- ・指導者は、ファウルを審判員にアピールするのではなく、「その程度で倒れない」、「倒れても直ぐに立ち上がり次のプレーをする」ことを選手に意識させる。

押さえる、押す等のファウルを受けた選手が次のプレーを止めてしまった。

- ・指導者は、ファウルを審判員にアピールするのではなく、「押さえられても振りほどいて（ファウルにならないように）前に進む」、「押されても耐えて次のプレーをする」ことを選手に意識させる。

※次のプレーが出来る状態でない場合は除く。例えば相手に強くけられたことにより立ち上がれない、相手に押さえられ完全にスピードが落ちた、止められた場合。

藤沢市少年サッカーの審判員として、 タフな選手を育成するために

《審判員》

審判員は、慌ててファウルを判断しないで、アドバンテージによりプレーを続けさせます。審判員は明らかかなファウルだけを判断します。

具体的には

サッカーの経験によらず、誰が見てもファウルと判断ができる場合にプレーを停止します。

- ・相手に強くけられたことにより立ち上がれない、相手に押さえられ完全にスピードが落ちた、止められた場合。
- ・ヘディングしようとしている相手に足を高く上げて接触しそうな場合。

主審は、特にこの様な誰が見てもファウルと判断ができるプレーだけをファウルと判断することを心掛けます。

副審は、オフサイドの反則を第一に考え、必要な時に合図をします。

藤沢市少年サッカーの選手として、 タフな選手に成長するために

《選手》

プレーを続けることを第一に考えます。

フェアプレーの意識を高めます。

正しい判断をします。

具体的には

ファウルを受けても倒れない、直ぐに立ち上がる、次のプレーを考える。

コーナーキック、ゴールキック、スローインの判断は、原則は選手が行う。

※審判員は、選手が判断を誤った場合や、最後にボールをプレーした選手の判断が困難な場合に合図をする。もちろん主審の判断が最終である。

藤沢市少年サッカーのレベルアップ ～タフな選手の育成～を図るために

これらのことを、藤沢市少年サッカーとして意志統一することが必要です。

決してこの方向性を利用して、例えば「審判員は細かいファウルは取らないからやっても構わない。タッチアウトしたら相手のボールでも取りに行け。」等を指導しません。

フェアプレーが選手の成長を伸ばすことを指導者、審判員は理解する必要があります。

試合の中での駆け引きも必要だが、小学生年代は笛が鳴るまでプレーを続けることが第一であり、審判員との関係は小学生年代が終わってからも十分に対応できると考えられます。

指導者・審判員・保護者が一体となり、サッカーのレベルアップを図るとともに「タフな選手を育成」して、小学生年代に藤沢のチームでサッカーをやって良かったなと思ってもらえれば・・・